

<研究ノート>

「不登校」支援についての試案 (1) －大学生の意見に基づいて－

松 浦 光 和
松 浦 明 美*

問題

「不登校」について文科省の「学校教育法施行規則の一部を改正する省令の施行等について(通知)」(2005)では「児童生徒について、不登校状態であるか否かは、小学校又は中学校における不登校児童生徒に関する文部科学省の調査で示された年間30日以上欠席という定義が一つの参考となり得ると考えられるが、その判断は小学校等又はその管理機関が行うこととし、例えば、断続的な不登校や不登校の傾向が見られる児童生徒も対象となり得るものであること。」(17文科初第485号)とし、30日以上欠席を一応の目安にしている。

不登校についての調査・研究も多く行われている。文科省の「不登校児童生徒への支援に関する中間報告」(2017)から「不登校となったきっかけ」をTable 1に引用したが、「学校に係る状況」として「いじめ」、「いじめを除く友人関係をめぐらる問題」、「教職員との関係をめぐらる問題」、「学業の不振」、「進路にかかる不安」、「クラブ活動、部活動等への不適応」、「学校のきまり等をめぐらる問題」、「入学、転編入学、進級時の不適応」が挙げられ、「家庭に係る状況」として、「家庭の生活環境の急激な変化」、「親子関係をめぐらる問題」、「家庭内の不和」が挙げられ、「本人に係る状況」として「病気による欠席」、「あそび・非行」、「無気力」、「不安など情緒的混乱」、「意図的な拒否」、「上記『病気による欠席』から『意図的な拒否』までのいずれにも該当しない、本人に関わる問題」が挙げられている。Table 1で割合が高い項目を挙げてみると、「学校に係る状況」では、「いじめを除く友人関係をめぐらる問題」(平成24年度14.8%、同25年度15.0%)、「家庭に係る状況」では「親子関係をめぐらる問題」(平成24年度11.1%、同25年度10.9%)、「本人に係る状況」では、「無気力」(平成24年度25.9%、同25年度25.6%)と「不安など情緒的混乱」(平成24年度26.6%、同25年度28.1%)であり、「きっかけ」が概観出来る。

さらに文科省は、「不登校児童生徒への支援に関する中間報告」(2017)で、「指導の結果登校するようになった児童生徒に特に効果があった学校の措置」(以下で「学校の効果的措置」あるいは「効果的措置」と略すことがある)について平成18年度のデータ(Table 2)を提出

Table 1 不登校となったきっかけと考えられる状況の推移

区分		小学校		中学校		合計		
		人数 (人)	割合 (%)	人数 (人)	割合 (%)	人数 (人)	割合 (%)	
学校に係る状況	いじめ	24年度	413	1.9	1,923	2.1	2,336	2.1
		25年度	414	1.7	1,527	1.6	1,941	1.6
	いじめを除く友人関係をめぐる問題	24年度	2,332	11.0	14,382	15.7	16,714	14.8
		25年度	2,705	11.2	15,188	15.9	17,893	15.0
	教職員との関係をめぐる問題	24年度	692	3.3	1,346	1.5	2,038	1.8
		25年度	893	3.7	1,481	1.6	2,374	2.0
	学業の不振	24年度	1,609	7.6	8,686	9.5	10,295	9.1
		25年度	1,721	7.1	8,802	9.2	10,523	8.8
	進路にかかる不安	24年度	106	0.5	1,392	1.5	1,498	1.3
		25年度	92	0.4	1,473	1.5	1,565	1.3
	クラブ活動、部活動等への不応	24年度	31	0.1	2,026	2.2	2,057	1.8
		25年度	36	0.1	2,028	2.1	2,064	1.7
	学校のきまり等をめぐる問題	24年度	144	0.7	2,040	2.2	2,184	1.9
		25年度	143	0.6	1,935	2.0	2,078	1.7
入学、転編入学、進級時の不応	24年度	476	2.2	2,550	2.8	3,026	2.7	
	25年度	559	2.3	2,756	2.9	3,315	2.8	
家庭に係る状況	家庭の生活環境の急激な変化	24年度	2,036	9.6	4,326	4.7	6,362	5.6
		25年度	2,312	9.6	4,325	4.5	6,637	5.5
	親子関係をめぐる問題	24年度	4,287	20.2	8,175	8.9	12,462	11.1
		25年度	4,617	19.1	8,412	8.8	13,029	10.9
	家庭内の不和	24年度	1,052	5.0	3,430	3.8	4,482	4.0
		25年度	1,155	4.8	3,390	3.6	4,545	3.8
本人に係る状況	病気による欠席	24年度	1,982	9.3	6,630	7.3	8,612	7.6
		25年度	2,324	9.6	7,134	7.5	9,458	7.9
	あそび・非行	24年度	274	1.3	10,397	11.4	10,671	9.5
		25年度	265	1.1	9,798	10.3	10,063	8.4
	無気力	24年度	5,047	23.8	24,149	26.4	29,196	25.9
		25年度	5,565	23.0	25,048	26.2	30,613	25.6
	不安など情緒的混乱	24年度	7,047	33.2	22,982	25.1	30,029	26.6
		25年度	8,541	35.3	25,040	26.2	33,581	28.1
	意図的な拒否	24年度	981	4.6	4,257	4.7	5,238	4.6
		25年度	1,196	4.9	4,605	4.8	5,801	4.8
上記「病気による欠席」から「意図的な拒否」までのいずれにも該当しない、本人に関わる問題	24年度	1,258	5.9	4,642	5.1	5,900	5.2	
	25年度	1,272	5.3	4,634	4.9	5,906	4.9	
その他	24年度	1,216	5.7	1,506	1.6	2,722	2.4	
	25年度	1,310	5.4	1,403	1.5	2,713	2.3	
不明	24年度	376	1.8	1,512	1.7	1,888	1.7	
	25年度	388	1.6	1,527	1.6	1,915	1.6	

「不登校児童生徒への支援に関する中間報告」(文部科学省 2017) より

している。これは、①「学校内での指導の改善工夫」、②「家庭への働きかけ」、③「他の機関との連携」、④「他」の4に区分されている。それぞれの詳細であるが、①は「不登校の問題について、研修会や事例研究会を通じて全教師の共通理解を図る」、「全ての教師が当該児童生徒に触れ合いを多くするなどして学校全体で指導」、「教育相談担当の教師が専門的に指導」など10項目、②は「登校を促すため、電話をかけたり迎えに行く」など3項目、③は「教育相談センター等の相談機関と連携して指導」など2項目、④は具体的な項目表示はなかった。この様にして効果的な方法も判明している。

研究も進んでいて、早川(2002)は、スクールカウンセラーとして不登校生徒に関わって効

Table 2 平成18年度における「指導の結果登校するようになった児童生徒」に特に効果があった学校の措置

区分	項目	国公立小学校	国公立中学校	計
		計	計	合計
学校内での指導の改善工夫	① 不登校の問題について、研修会や事例研究会を通じて全教師の共通理解を図った	3,182	4,047	7,229
	② 全ての教師が当該児童生徒に触れ合いを多くするなどして学校全体で指導にあたった	2,514	3,441	5,955
	③ 教育相談担当の教師が専門的に指導にあたった	1,125	2,206	3,331
	④ 養護教諭が専門的に指導にあたった	1,721	3,046	4,767
	⑤ スクールカウンセラー等が専門的に指導にあたった	2,039	5,333	7,372
	⑥ 友人関係を改善するための指導を行った	2,541	3,703	6,244
	⑦ 教師との触れ合いを多くするなど、教師との関係を改善した	2,709	3,585	6,294
	⑧ 授業方法の改善、個別の指導など授業がわかるようにする工夫を行った	1,468	1,826	3,294
	⑨ 様々な活動の場面において本人が意欲を持って活動できる場を用意した	2,636	2,793	5,429
	⑩ 保健室等特別の場所に登校させて指導にあたった	2,485	4,932	7,417
働きかけへの	⑪ 登校を促すため、電話をかけたリ迎えに行くなどした	4,035	5,561	9,596
	⑫ 家庭訪問を行い、学業や生活面での相談に乗るなど様々な指導・援助を行った	3,825	6,161	9,986
	⑬ 保護者の協力を求めて、家族関係や家庭生活の改善を図った	3,346	4,458	7,804
その他の連携機関	⑭ 教育相談センター等の相談機関と連携して指導にあたった	1,888	3,127	5,015
	⑮ 病院等の医療機関と連携して指導にあたった	841	1,738	2,579
その他		363	622	985

「不登校児童生徒への支援に関する中間報告」(文部科学省 2017)より

Table 3 小・中学校の不登校児童生徒数の推移

区分	小学校				中学校				計			
	(A) 全児童数 (人)	(B) 不登校児童数 (人)	不登校児童数の増▲減率 (%)	(B/A×100) (%)	(A) 全生徒数 (人)	(B) 不登校児童数 (人)	不登校児童数の増▲減率 (%)	(B/A×100) (%)	(A) 全児童生徒数 (人)	(B) 不登校児童生徒数の合計 (人)	不登校児童生徒数の増▲減率 (%)	(B/A×100) (%)
3年度	9,157,429	12,645	(0.14)	-	5,188,314	54,172	(1.04)	-	14,345,743	66,817	(0.47)	-
4年度	8,947,226	13,710	(0.15)	8.4	5,036,840	58,421	(1.16)	7.8	13,984,066	72,131	(0.52)	8.0
5年度	8,768,881	14,769	(0.17)	7.7	4,850,137	60,039	(1.24)	2.8	13,619,018	74,808	(0.55)	3.7
6年度	8,582,871	15,786	(0.18)	6.9	4,681,166	61,663	(1.32)	2.7	13,264,037	77,449	(0.58)	3.5
7年度	8,370,246	16,569	(0.20)	5.0	4,570,390	65,022	(1.42)	5.4	12,940,636	81,591	(0.63)	5.3
8年度	8,105,629	19,498	(0.24)	17.7	4,527,400	74,853	(1.65)	15.1	12,633,029	94,351	(0.75)	15.6
9年度	7,855,387	20,765	(0.26)	6.5	4,481,480	84,701	(1.89)	13.2	12,336,867	105,466	(0.85)	11.8
10年度	7,663,533	26,017	(0.34)	25.3	4,380,604	101,675	(2.32)	20.0	12,044,137	127,692	(1.06)	21.1
11年度	7,500,317	26,047	(0.35)	0.1	4,243,762	104,180	(2.45)	2.5	11,744,079	130,227	(1.11)	2.0
12年度	7,366,079	26,373	(0.36)	1.3	4,103,717	107,913	(2.63)	3.6	11,469,796	134,286	(1.17)	3.1
13年度	7,296,920	26,511	(0.36)	0.5	3,991,911	112,211	(2.81)	4.0	11,288,831	138,722	(1.23)	3.3
14年度	7,239,327	25,869	(0.36)	▲2.4	3,862,849	105,383	(2.73)	▲6.1	11,102,176	131,252	(1.18)	▲5.4
15年度	7,226,910	24,077	(0.33)	▲6.9	3,748,319	102,149	(2.73)	▲3.1	10,975,229	126,226	(1.15)	▲3.8
16年度	7,200,933	23,318	(0.32)	▲3.2	3,663,513	100,040	(2.73)	▲2.1	10,864,446	123,358	(1.14)	▲2.3
17年度	7,197,458	22,709	(0.32)	▲2.6	3,626,415	99,578	(2.75)	▲0.5	10,823,873	122,287	(1.13)	▲0.9
18年度	7,187,417	23,825	(0.33)	4.9	3,609,306	103,069	(2.86)	3.5	10,796,723	126,894	(1.18)	3.8
19年度	7,132,874	23,927	(0.34)	0.4	3,624,113	105,328	(2.91)	2.2	10,756,987	129,255	(1.20)	1.9
20年度	7,121,781	22,652	(0.32)	▲5.3	3,603,220	104,153	(2.89)	▲1.1	10,725,001	126,805	(1.18)	▲1.9
21年度	7,063,606	22,327	(0.32)	▲1.4	3,612,747	100,105	(2.77)	▲3.9	10,676,353	122,432	(1.15)	▲3.4
22年度	6,993,376	22,463	(0.32)	0.6	3,572,652	97,428	(2.73)	▲2.7	10,566,028	119,891	(1.13)	▲2.1
23年度	6,887,292	22,622	(0.33)	0.7	3,589,774	94,836	(2.64)	▲2.7	10,477,066	117,458	(1.12)	▲2.0
24年度	6,764,619	21,243	(0.31)	▲6.1	3,569,010	91,446	(2.56)	▲3.6	10,333,629	112,689	(1.09)	▲4.1
25年度	6,676,920	24,175	(0.36)	13.8	3,552,455	95,442	(2.69)	4.4	10,229,375	119,617	(1.17)	6.1
26年度	6,600,006	25,864	(0.39)	7.0	3,520,730	97,033	(2.76)	1.7	10,120,736	122,897	(1.21)	2.7
27年度	6,543,104	27,583	(0.42)	6.6	3,481,839	98,408	(2.83)	1.4	10,024,943	125,991	(1.26)	2.5
28年度	6,491,834	31,151	(0.48)	12.9	3,426,962	103,247	(3.01)	4.9	9,918,796	134,398	(1.35)	6.7

「平成28年度『児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査』(速報値)について」(文部科学省 2017)より

果があった事例を上げ、中地 (2011) は、母親を通して不登校児の成長を支援し、筒井ら (1998) は、不登校児童生徒の前兆行動を教師が把握することが可能であることを見いだしており、不登校に対応する究明も進んでいる。

上記の如く文科省は不登校になるきっかけを追究し、小中学校は様々な措置を講じ改善する研究も進んでいるが、「平成28年度『児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査』(速報値)について」(2017)によれば、不登校児童生徒の人数・割合はTable 3の通りである。これは平成3年度から同28年度までの経過であるが、不登校児童生徒数のピークは平成13年度(138722人)であり、その後減少に転じているが、その割合は平成28年度に再び上昇し、ピークの平成13年度(1.23%)より高い1.35%に達している。

現時点での不登校児童生徒の支援は道半ばであり、さらなる支援が必要とされている。

1. 目的

この研究では、数ヶ月から数年前まで高校生や中学生として過ごした大学生から不登校児童生徒を支援する意見を求めて集約する。学生は児童生徒と年齢が近いので、現場の教員や研究者とは異なった視点で支援方法を考えている可能性がある。

さらに教員免許状取得を目指す学生と目指さない学生との間で考え方を比較して、前者の特色を究明にしたい。

2. 方法

(1) 質問票作成

2017年1月、M大学の学生184名に児童生徒の不登校を減らすための効果的で、可能な限り独自の支援方法を提案するように依頼した。複数回答も可とした。提案された内容を纏め内容が重複するものを除いて質問票「不登校支援アンケート」を作成した。これは42の質問項目からなり、回答方法は「とても効果あり」、「少し効果あり」、「どちらとも言えない」、「ほとんど効果なし」、「効果なし」の5件法である。(付録)。

(2) 調査実施

①調査時期：2017年7月

②被験者：東北と北海道の3大学の学生418名。内訳は、男性112名、女性296名、性別無回答10名。1年生138名、2年生147名、3年生56名、4年生65名、学年無回答12名。教員免許状志望者(以下、「教員志望者」と略すことがある)234名、教員免許状非志望者(以

Table 4 被験者の内訳

性別	教員免許状	学年					合計
		1	2	3	4	無回答	
男性	志望	40	5	2		0	47
	非志望	55	2	2		0	59
	無回答	5	0	0		1	6
	小計	100	7	4		1	112
女性	志望	18	97	3	64	0	182
	非志望	19	42	49	1	1	112
	無回答	1	1	0	0	0	2
	小計	38	140	52	65	1	296
無回答	志望					5	5
	非志望					2	2
	無回答					3	3
	小計					10	10
合計	志望	58	102	5	64	5	234
	非志望	74	44	51	1	3	173
	無回答	6	1	0	0	4	11
	小計	138	147	56	65	12	418

下、「非志望者」と略すことがある) 173名、志望・非志望について無回答者11名 (Table 4)。

③データ処理

採点：項目への回答は「とても効果あり」、「少し効果あり」、「どちらとも言えない」、「ほとんど効果なし」、「効果なし」であるが、それぞれ5点、4点、3点、2点、1点とした。

項目分類：項目を因子分析によって分類。

因子ごとの教員志望者と非志望者の比較：各因子の得点を得て教員志望者と非志望者の間で比較。

3. 結果と考察

(1) 因子分析の結果

因子分析の結果を Table 5 に示した。寄与率は60.58%であった。

第 I 因子は、「18.学校が不登校の児童・生徒個々に合わせた対応方法を見つける」、「39.学校が児童・生徒の小さな変化に気がついて対応する」、「40.担任のみに責任を負わずに、専門機関とも連携しながら学校全体で支援する」、「19.学校と家庭が連携して、不登校の児童・生徒に向き合う様にする」、「16.不登校原因の発見と対応を早期に行う」、「36.教師が、不登校の児童・生徒と真剣に向き合う」、「27.教師やカウンセラーに相談しやすい環境を作る」、「37.同じ悩みを持つ子ども達が話し合える場所をもうける」、「41.児童・生徒が居心地の良い場所を見つけられる様に学校が積極的に考える」、「11.担任は、何度もこまめに相談に応じる様にする」、「15.社会が、児童・生徒に居場所を提供する様にする」、「31.社会が学校以外にも、落ち着ける場所を増やす」の12項目からなる。家庭・学校・教員・カウンセラー・社会の積極

Table 5 因子分析の結果

項目		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	共通性
I. 周囲の積極的関心										
18	学校が不登校の児童・生徒個々に合わせた対応方法を見つける	.738	.244	-.013	.032	.117	.156	.065	.082	.654
39	学校が児童・生徒の小さな変化に気がついて対応する	.727	.174	.252	.152	-.022	-.001	.241	.035	.705
40	担任のみに責任を負わずに、専門機関とも連携しながら学校全体で支援する	.715	.169	.125	.315	.085	-.036	.114	-.003	.676
19	学校と家庭が連携して、不登校の児童・生徒に向き合う様にする	.685	.288	.067	.033	.071	.087	.114	.229	.636
16	不登校原因の発見と対応を早期に行う	.684	.146	.179	.011	-.023	-.002	.261	.255	.655
36	教師が、不登校の児童・生徒と真剣に向き合う	.668	.282	.259	.224	.000	-.077	.026	.109	.661
27	教師やカウンセラーに相談しやすい環境を作る	.623	.186	.155	.377	-.005	.017	.085	.292	.682
37	同じ悩みを持つ子ども達が話し合える場所をもうける	.549	.229	.217	.245	.033	.226	.011	-.134	.531
41	児童・生徒が居心地の良い場所を見つけられる様に学校が積極的に考える	.515	.340	.182	.358	-.002	.014	.290	-.016	.627
11	担任は、何度でもこまめに相談に応じる様にする	.474	.290	.311	.123	.036	-.001	.077	.447	.628
15	社会が、児童・生徒に居場所を提供する様にする	.403	.035	.011	.304	.186	.289	.287	.145	.478
31	社会が学校以外にも、落ち着ける場所を増やす	.402	.075	.106	.390	.222	.251	.189	-.091	.487
II. 周囲の工夫										
21	学校に行きたいと思わせる工夫をする	.359	.784	.072	-.006	.024	.043	.131	.177	.800
20	学校内に「楽しい」と思える場所を増やす	.403	.726	.033	.146	.007	.073	.097	.072	.732
17	教師が工夫してクラスを楽しみと思えるようにする	.415	.558	.234	.059	.083	-.063	.267	.242	.683
35	教師が授業を楽しみと思える様に工夫する	.460	.513	.293	.204	.030	-.032	.130	-.035	.622
10	「自分はこのクラスに必要だ」と思えるように指導をする	.188	.504	.321	.248	.019	.048	.244	.076	.522
26	登校しなくなるようなきっかけを学校が検討する	.382	.499	.257	.143	.100	.076	.096	.101	.517
III. クラスメート・教員の支援										
32	学校に来る様に教員やクラスメートで呼びかける	.011	.190	.786	.066	-.021	.111	.175	.074	.707
33	学校内に相談できるクラスメートが出来る様に学校が手伝う	.204	.260	.755	.142	.060	.093	-.068	.015	.717
34	不登校の兆候が現れたら、教員全体で共有して指導する	.335	.003	.683	.124	-.048	.101	.067	.093	.620
38	クラスメートに不登校の児童・生徒に対する適切な対応方法を教える	.373	-.037	.524	-.086	.162	.256	.346	.088	.642
12	授業を通して、クラスメートが不登校の人の気持ちを考える様に する	.323	.109	.488	.056	.026	.124	.320	.230	.529
IV. クラス以外の居場所										
9	居場所は教室だけでなく保健室などもあることを学校が伝える	.285	-.022	.167	.636	.169	.134	.142	.148	.603
4	登校の児童・生徒が自由に来て、自由に過ごせる空間をつくる	.031	.180	-.019	.621	.123	.236	.137	.088	.517
28	クラス以外の居場所を複数設定する	.220	.232	.044	.618	.145	.280	.014	.124	.601
29	保健室登校をしながら慣れる様にする	.329	.058	.160	.610	.240	.118	.017	.099	.591
42	大学生など歳の近い先輩が、児童・生徒に関わって支援出来るよ うにする	.337	.183	.242	.406	.061	.123	.236	-.298	.534
V. 自主的な活動促進										
24	気分が落ち着くまで存分に休んでも良いというルールを作る	.021	-.108	.067	.306	.714	.003	.046	-.028	.623
22	部活の中で起きやすいので、部活参加を自由にする	.071	.100	.100	.163	.678	.145	.091	.115	.554
25	自宅でPCなどでも授業を受けられる様にする	.111	-.073	-.018	.136	.670	.129	-.083	-.148	.531
23	クラス単位ではなく、大学の様に個人々が授業を選択できるように にする	.011	.115	-.131	-.096	.658	.117	-.005	.016	.487
30	教室内のルールを緩くするなどして、自由な活動を可能にする	-.173	.270	.257	.259	.456	.299	.123	.078	.555
VI. クラスの自由な設定										
5	所属するクラスを臨機応変に変更出来る様にする	.011	-.024	.035	.148	.118	.682	.141	.120	.537
14	極めて少人数のクラスを設けて登校しやすくする	.185	.132	.087	.042	.188	.677	.059	-.240	.616
3	不登校の児童・生徒のみのクラスを作って、過ごし易い様にする	-.057	.018	.214	.180	.041	.664	.001	.065	.529
13	他の児童・生徒と会わないように、時間をずらして登校できる様 にする	.124	-.042	.053	.322	.255	.555	-.210	.020	.541
VII. 解釈不能										
7	児童同士・生徒同士が積極的に関わられるような環境をつくる	.137	.283	.297	.095	-.037	-.003	.723	.090	.728
8	学力以外の側面についても評価して、児童・生徒が自信を持てる ようにする	.327	.343	-.007	.132	.008	-.025	.613	-.008	.619
6	1クラス2名の担任にして、ゆとりを持って指導できる様にする	.345	.024	.146	.229	.099	.171	.532	.107	.527
VIII. 積極的な寄り添い										
1	教員が、児童・生徒の悩みを聴くための機会を定期的にもうける	.270	.205	.209	.199	-.020	-.022	.089	.646	.624
2	寄り添ってくれる教師が増える様に学校が工夫する	.433	.225	.096	.196	-.036	.175	.138	.532	.620
分散		6.68	3.48	3.31	3.20	2.48	2.42	2.22	1.64	25.443
寄与率(%)		15.91	8.29	7.88	7.63	5.90	5.77	5.29	3.90	60.58

的な関与を主な内容としていると解釈出来るので、これを「周囲の積極的関心」因子と命名する。

第Ⅱ因子は、「21.学校に行きたいと思わせる工夫をする」、「20.学校内に『楽しい』と思える場所を増やす」、「17.教師が工夫してクラスを楽しいと思えるようにする」、「35.教師が授業を楽しいと思える様に工夫する」、「10.『自分はこのクラスに必要なだ』と思えるように指導をする」、「26.登校したくなるようなきっかけを学校が検討する」の6項目からなる。周囲のより積極的な工夫によって不登校児童生徒の認識が肯定的に変化すると解釈出来るので、これを「周囲の工夫」因子と命名する。

第Ⅲ因子は、「32.学校に来る様に教員やクラスメートで呼びかける」、「33.学校内に相談できるクラスメートが出来る様に学校が手伝う」、「34.不登校の兆候が現れたら、教員全体で共有して指導する」、「38.クラスメートに不登校の児童・生徒に対する適切な対応方法を教える」、「12.授業を通して、クラスメートが不登校の人の気持ちを考える様にする」の5項目からなる。クラスメートの関わりを中心としているが、教員が皆で情報共有することも含まれているので、これを「クラスメート・教員の支援」因子と命名する。

第Ⅳ因子は、「9.居場所は教室だけでなく保健室などもあることを学校が伝える」、「4.登校の児童・生徒が自由に来て、自由に過ごせる空間をつくる」、「28.クラス以外の居場所を複数設定する」、「29.保健室登校をしながら慣れる様にする」、「42.大学生など歳の近い先輩が、児童・生徒に関わって支援出来るようにする」の5因子からなる。クラス以外を居場所とする提案である。クラスにいることの煩わしさや不自由さから開放することを内容としていると解釈出来るので、これを「クラス以外の居場所」因子と命名する。

第Ⅴ因子は、「24.気分が落ち着くまで存分に休んでも良いというルールを作る」、「22.部活の中で起きやすいので、部活参加を自由にする」、「25.自宅でPCなどでも授業を受けられる様にする」、「23.クラス単位ではなく、大学の様に個人が授業を選択できるようにする」、「30.教室内のルールを緩くするなどして、自由な活動を可能にする」の5項目からなる。既存の規則で縛らないで、自由な行動を可能にすることを内容としていると解釈出来るので、これを「自主的な活動促進」因子と命名する。

第Ⅵ因子は、「5.所属するクラスを臨機応変に変更出来る様にする」、「14.極めて少人数のクラスを設けて登校しやすくする」、「3.不登校の児童・生徒のみのクラスを作って、過ごし易い様にする」、「13.他の児童・生徒と会わないように、時間をずらして登校できる様にする」の4項目からなる。クラスを固定したメンバーからなる集団とは考えないで、固定しない方が不登校児童生徒にとっては過ごし易いと解釈出来る。これを「自由なクラスの設定」因子と命名する。

第Ⅶ因子は、「7.児童同士・生徒同士が積極的に関わられるような環境をつくる」、「8.学力以

外の側面についても評価して、「児童・生徒が自信を持てるようにする」、「6.1クラス2名の担任にして、ゆとりを持って指導できる様にする」の3項目からなるが、解釈は出来なかったので、「解釈不能」とした。

第Ⅷ因子は、「1.教員が、児童・生徒の悩みを聴くための機会を定期的にもうける」、「2.寄り添ってくれる教師が増える様に学校が工夫する」の2項目からなる。教員の積極的な関わりを示す内容であり、これを「積極的な寄り添い」因子と命名する。

命名された各因子は「周囲の積極的関心」(第Ⅰ因子)、「周囲の工夫」(第Ⅱ因子)、「クラスメート・教員の支援」(第Ⅲ因子)、「クラス以外の居場所」(第Ⅳ因子)、「自主的な活動促進」(第Ⅴ因子)、「自由なクラスの設定」(第Ⅵ因子)、「積極的な寄り添い」(第Ⅶ因子)であるが、これらは、「周囲の積極的関心」、「周囲の工夫」、「クラスメート・教員の支援」など、周囲からの支援と既存のクラスの枠組みにとらわれない「クラス以外の居場所」、「自由なクラスの設定」と、不登校児童生徒の自主的な活動を促進したいとする「自主的な活動促進」からなっている。また、これらの支援を円滑にすると考えられる「積極的な寄り添い」も見いだされた。

(2) 学校現場での効果的措置と「学生の意見」の比較

- i. 学校の効果的措置に近い「学生の意見」:「平成18年度における『指導の結果登校するようになった児童生徒』に特に効果があった学校の効果的措置」(Table 2)に載っている項目(例えば「不登校の問題について、研修会や事例研究会を通じて全教師の共通理解を図った」)は全国の小中学校で実施された複数の効果的措置を纏めた結果であり、学生の意見 (Table 5) と単純に比較することは困難ではあるが、敢えて近い項目をならべてみた (Table 6)。その結果、
- ①「不登校の問題について、研修会や事例研究会を通じて全教師の共通理解を図った」(効果的措置)には、項目34「不登校の兆候が現れたら、教員全体で共有して指導する」、項目40「担任のみに責任を負わずに、専門機関とも連携しながら学校全体で支援する」が近いと考えられる。
 - ②「全ての教師が当該児童生徒に触れ合いを多くするなどして学校全体で指導にあたった」(効果的措置)には、項目36「教師が、不登校の児童・生徒と真剣に向き合う」が近いと考えられる。
 - ③「教育相談担当の教師が専門的に指導にあたった」(効果的措置)には、項目1「教員が、児童・生徒の悩みを聴くための機会を定期的にもうける」、項目2「寄り添ってくれる教師が増える様に学校が工夫する」、項目36「教師が、不登校の児童・生徒と真剣に向き合う」が近いと考えられる。
 - ④「養護教諭が専門的に指導にあたった」(効果的措置)には、項目36「教師が、不登校の児童・生徒と真剣に向き合う」が近いと考えられる。

Table 6 「学校での効果的措置」に近いと考えられる「学生の意見」

学校現場での効果的措置	学生の意見		
	因子	項目	項目
①不登校の問題について、研修会や事例研究会を通じて全教師の共通理解を図った	III	34	不登校の兆候が現れたら、教員全体で共有して指導する
	I	40	担任のみに責任を負わずに、専門機関とも連携しながら学校全体で支援する
②全ての教師が当該児童生徒に触れ合いを多くするなどして学校全体で指導にあたった	I	36	教師が、不登校の児童・生徒と真剣に向き合う
③教育相談担当の教師が専門的に指導にあたった	VIII	1	教員が、児童・生徒の悩みを聴くための機会を定期的にもうける
		2	寄り添ってくれる教師が増える様に学校が工夫する
④養護教諭が専門的に指導にあたった	I	36	教師が、不登校の児童・生徒と真剣に向き合う
⑤スクールカウンセラー等が専門的に指導にあたった	I	27	教師やカウンセラーに相談しやすい環境を作る
⑥友人関係を改善するための指導を行った	VII	7	児童同士・生徒同士が積極的に関われるような環境をつくる
	III	33	学校内に相談できるクラスメートが出来る様に学校が手伝う
⑦教師との触れ合いを多くするなど、教師との関係を改善した	I	11	担任は、何度もこまめに相談に応じる様にする
⑧授業方法の改善、個別の指導など授業がわかるようにする工夫を行った	I	18	学校が不登校の児童・生徒個々に合わせた対応方法を見つける
⑨様々な活動の場面において本人が意欲を持って活動できる場を用意した	II	21	学校に行きたいと思わせる工夫をする
	I	27	教師やカウンセラーに相談しやすい環境を作る
⑩保健室等特別の場所に登校させて指導にあたった	IV	4	登校の児童・生徒が自由に来て、自由に過ごせる空間をつくる
		9	居場所は教室だけでなく保健室などもあることを学校が伝える
	II	20	学校内に「楽しい」と思える場所を増やす
	I	27	教師やカウンセラーに相談しやすい環境を作る
		41	児童・生徒が居心地の良い場所を見つけられる様に学校が積極的に考える
	IV	28	クラス以外の居場所を複数設定する
	29	保健室登校をしながら慣れる様にする	
⑪登校を促すため、電話をかけたり迎えに行くなどした	III	32	学校に来る様に教員やクラスメートで呼びかける
⑫家庭訪問を行い、学業や生活面で相談に乗るなど様々な指導・援助を行った	I	19	学校と家庭が連携して、不登校の児童・生徒に向き合う様にする
⑬保護者の協力を求めて、家族関係や家庭生活の改善を図った	I	19	学校と家庭が連携して、不登校の児童・生徒に向き合う様にする

- ⑤「スクールカウンセラー等が専門的に指導にあたった」（効果的措置）には、項目27「教師やカウンセラーに相談しやすい環境を作る」が近いと考えられる。
- ⑥「友人関係を改善するための指導を行った」（効果的措置）には、項目7「児童同士・生徒同士が積極的に関われるような環境をつくる」、項目33「学校内に相談できるクラスメートが出来る様に学校が手伝う」が近いと考えられる。
- ⑦「教師との触れ合いを多くするなど、教師との関係を改善した」（効果的措置）には、項目11「担任は、何度もこまめに相談に応じる様にする」が近いと考えられる。
- ⑧「授業方法の改善、個別の指導など授業がわかるようにする工夫を行った」（効果的措置）には、項目18「学校が不登校の児童・生徒個々に合わせた対応方法を見つける」が近いと考えられる。
- ⑨「様々な活動の場面において本人が意欲を持って活動できる場を用意した」（効果的措置）には、項目21「学校に行きたいと思わせる工夫をする」、項目27「教師やカウンセラーに相談しやすい環境を作る」が近いと考えられる。

Table 7 学生独自の意見

因子	解釈	番号	項目
I	周囲の積極的関心	15	社会が、児童・生徒に居場所を提供する様にする
		16	不登校原因の発見と対応を早期に行う
		31	社会が学校以外にも、落ち着ける場所を増やす
		37	同じ悩みを持つ子ども達が話し合える場所をもうける
		39	学校が児童・生徒の小さな変化に気がついて対応する
II	周囲の工夫	10	「自分はこのクラスに必要だ」と思えるように指導をする
		17	教師が工夫してクラスを楽しいと思えるようにする
		26	登校したくなるようなきっかけを学校が検討する
		35	教師が授業を楽しいと思える様に工夫する
III	クラスメート・教員の支援	12	授業を通して、クラスメートが不登校の人の気持ちを考える様にする
		38	クラスメートに不登校の児童・生徒に対する適切な対応方法を教える
IV	クラス以外の居場所	42	大学生など歳の近い先輩が、児童・生徒に関わって支援出来るようにする
V	自主的な活動促進	22	部活の中で起きやすいので、部活参加を自由にする
		23	クラス単位ではなく、大学の様に個々が授業を選択できるようにする
		24	気分が落ち着くまで存分に休んでも良いというルールを作る
		25	自宅でPCなどでも授業を受けられる様にする
		30	教室内のルールを緩くするなどして、自由な活動を可能にする
VI	クラスの自由な設定	3	不登校の児童・生徒のみのクラスを作って、過ごし易い様にする
		5	所属するクラスを臨機応変に変更出来る様にする
		13	他の児童・生徒と会わないように、時間をずらして登校できる様にする
		14	極めて少人数のクラスを設けて登校しやすくする
VII	解釈不能	6	1クラス2名の担任にして、ゆとりを持って指導できる様にする
		8	学力以外の側面についても評価して、児童・生徒が自信を持てるようにする

⑩「保健室等特別の場所に登校させて指導にあたった」(効果的措置)には、項目4「登校の児童・生徒が自由に来て、自由に過ごせる空間をつくる」、項目9「居場所は教室だけでなく保健室などもあることを学校が伝える」、項目20「学校内に「楽しい」と思える場所を増やす」、項目27「教師やカウンセラーに相談しやすい環境を作る」、項目41「児童・生徒が居心地の良い場所を見つけられる様に学校が積極的に考える」、項目28「クラス以外の居場所を複数設定する」、項目29「保健室登校をしながら慣れる様にする」が近いと考えられる。

⑪「登校を促すため、電話をかけたり迎えに行くなどした」(効果的措置)には、項目32「学校に来る様に教員やクラスメートで呼びかける」が近いと考えられる。

⑬「家庭訪問を行い、学業や生活面での相談に乗るなど様々な指導・援助を行った」と⑭「保護者の協力を求めて、家族関係や家庭生活の改善を図った」(効果的措置)には、項目19「学校と家庭が連携して、不登校の児童・生徒に向き合う様にする」が近いと考えられる。

ii. 「学校の効果的措置」にはもられてない学生独自の意見：学生の意見には、学校現場での効果的措置にはもられていない内容も見える。それらは以下の通りである (Table 7)。

1. 「不登校の児童・生徒のみのクラスを作って、過ごし易い様にする」(項目3)
2. 「所属するクラスを臨機応変に変更出来る様にする」(項目5)
3. 「1クラス2名の担任にして、ゆとりを持って指導できる様にする」(項目6)
4. 「学力以外の側面についても評価して、児童・生徒が自信を持てるようにする」(項目8)
5. 「『自分はこのクラスに必要だ』と思えるように指導をする」(項目10)

6. 「授業を通して、クラスメートが不登校の人の気持ちを考える様にする」(項目12)
7. 「他の児童・生徒と会わないように、時間をずらして登校できる様にする」(項目13)
8. 「極めて少人数のクラスを設けて登校しやすくする」(項目14)
9. 「社会が、児童・生徒に居場所を提供する様にする」(項目15)
10. 「不登校原因の発見と対応を早期に行う」(項目16)
11. 「教師が工夫してクラスを楽しいと思えるようにする」(項目17)
12. 「部活の中で起きやすいので、部活参加を自由にする」(項目22)
13. 「クラス単位ではなく、大学の様に個人が授業を選択できるようにする」(項目23)
14. 「気分が落ち着くまで存分に休んでも良いというルールを作る」(項目24)
15. 「自宅でPCなどでも授業を受けられる様にする」(項目25)
16. 「登校したくなるようなきっかけを学校が検討する」(項目26)
17. 「教室内のルールを緩くするなどして、自由な活動を可能にする」(項目30)
18. 「社会が学校以外にも、落ち着ける場所を増やす」(項目31)
19. 「教師が授業を楽しいと思える様に工夫する」(項目35)
20. 「同じ悩みを持つ子ども達が話し合える場所をもうける」(項目37)
21. 「クラスメートに不登校の児童・生徒に対する適切な対応方法を教える」(項目38)
22. 「学校が児童・生徒の小さな変化に気がついて対応する」(項目39)
23. 「大学生など歳の近い先輩が、児童・生徒に関わって支援出来るようにする」(項目42)

である。この中の

項目3「不登校の児童・生徒のみのクラスを作って、過ごし易い様にする」、

項目5「所属するクラスを臨機応変に変更出来る様にする」、

項目13「他の児童・生徒と会わないように、時間をずらして登校できる様にする」、

項目14「極めて少人数のクラスを設けて登校しやすくする」、

は児童生徒に寄り添った考え方であり、斬新である。

iii. 教員志望者と非志望者の比較

項目や因子の得点が高いほど、不登校の児童・生徒を減らす効果があると期待していることになるが、ここでは、項目次元と因子次元で教員志望者と非志望者の両群の期待の比較を行った。

項目次元の比較結果をTable 8に示した。31の項目で5%以下の有意差があり、項目23以外では、教員志望者が高かった。項目23は「クラス単位ではなく、大学の様に個人が授業を選択できるようにする」であるが、この項目のみ教員志望者の期待が低かった。教員志望者は小中学校・高等学校のクラス編成の実態を知っているので、この項目を実現することに困難を

Table 8 教員志望者と非志望者の項目ごとの比較

質問項目	区分	平均値	標準偏差	t 値	df	有意確率	高低比較
1. 教員が、児童・生徒の悩みを聴くための機会を定期的にもうける	志望	4.1	0.90	3.60	401	***	志望>非志望
	非志望	3.75	1.05				
2. 寄り添ってくれる教師が増える様に学校が工夫する	志望	4.26	0.89	3.27	403	**	志望>非志望
	非志望	3.95	1.04				
3. 不登校の児童・生徒のみのクラスを作って、過ごし易い様にする	志望	2.82	1.09	0.75	402		
	非志望	2.73	1.23				
4. 不登校の児童・生徒が自由に来て、自由に過ごせる空間をつくる	志望	3.84	0.96	2.11	404	*	志望>非志望
	非志望	3.63	1.08				
5. 所属するクラスを臨機応変に変更出来る様にする	志望	3.02	0.96	0.51	403		
	非志望	2.97	1.25				
6. 1クラス2名の担任にして、ゆとりを持って指導できる様にする	志望	3.76	1.03	4.34	402	***	志望>非志望
	非志望	3.29	1.14				
7. 児童同士・生徒同士が積極的に関わられるような環境をつくる	志望	3.99	0.86	3.98	402	***	志望>非志望
	非志望	3.59	1.13				
8. 学力以外の側面についても評価して、児童・生徒が自信を持てるようにする	志望	4.3	0.88	3.13	402	**	志望>非志望
	非志望	4.01	0.98				
9. 居場所は教室だけでなく保健室などもあることを学校が伝える	志望	4.08	0.94	4.24	402	***	志望>非志望
	非志望	3.64	1.14				
10. 「自分はこのクラスに必要だ」と思えるように指導をする	志望	3.86	1.01	2.85	402	**	志望>非志望
	非志望	3.55	1.17				
11. 担任は、何度もこまめに相談に応じる様にする	志望	4.07	0.97	3.10	402	**	志望>非志望
	非志望	3.75	1.06				
12. 授業を通して、クラスメートが不登校の人の気持ちを考える様にする	志望	3.55	1.01	2.90	402	**	志望>非志望
	非志望	3.22	1.27				
13. 他の児童・生徒と会わないように、時間をずらして登校できる様にする	志望	3.31	0.99	2.30	401	*	志望>非志望
	非志望	3.06	1.17				
14. 極めて少人数のクラスを設けて登校しやすくする	志望	3.3	0.90	1.07	402		
	非志望	3.19	1.14				
15. 社会が、児童・生徒に居場所を提供する様にする	志望	3.82	0.85	2.20	402	*	志望>非志望
	非志望	3.62	1.01				
16. 不登校原因の発見と対応を早期に行う	志望	4.46	0.76	3.81	397	***	志望>非志望
	非志望	4.12	0.99				
17. 教師が工夫してクラスを楽しみたいと思えるようにする	志望	4.16	0.91	3.11	396	**	志望>非志望
	非志望	3.86	1.00				
18. 学校が不登校の児童・生徒個々に合わせた対応方法を見つける	志望	4.27	0.85	1.59	395		
	非志望	4.13	0.88				
19. 学校と家庭が連携して、不登校の児童・生徒に向き合う様にする	志望	4.34	0.85	3.62	399	***	志望>非志望
	非志望	3.98	1.14				
20. 学校内に「楽しい」と思える場所を増やす	志望	4.29	0.87	1.22	397		
	非志望	4.18	0.96				
21. 学校に行きたいと思わせる工夫をする	志望	4.26	0.89	1.73	400		
	非志望	4.09	1.01				
22. 部活の中で起きやすいので、部活参加を自由にする	志望	3.13	1.06	-0.14	400		
	非志望	3.14	1.17				
23. クラス単位ではなく、大学の様に個人々が授業を選択できるようにする	志望	3	1.12	-3.79	399	***	志望<非志望
	非志望	3.43	1.15				
24. 気分が落ち着くまで存分に休んでも良いというルールを作る	志望	2.82	1.06	0.20	401		
	非志望	2.8	1.32				
25. 自宅でPCなどでも授業を受けられる様にする	志望	3.16	1.05	-0.77	401		
	非志望	3.25	1.24				
26. 登校したくなるようなきっかけを学校が検討する	志望	3.96	0.85	2.26	397	*	志望>非志望
	非志望	3.75	1.00				
27. 教師やカウンセラーに相談しやすい環境を作る	志望	4.42	0.84	3.64	400	***	志望>非志望
	非志望	4.08	1.07				
28. クラス以外の居場所を複数設定する	志望	3.95	0.90	2.71	400	**	志望>非志望
	非志望	3.68	1.06				
29. 保健室登校をしながら慣れる様にする	志望	4.03	0.89	3.37	395	**	志望>非志望
	非志望	3.7	1.08				
30. 教室内のルールを緩くするなどして、自由な活動を可能にする	志望	3.11	1.02	-0.11	398		
	非志望	3.12	1.10				
31. 社会が学校以外にも、落ち着ける場所を増やす	志望	3.91	0.88	2.54	395	*	志望>非志望
	非志望	3.65	1.14				
32. 学校に来る様に教員やクラスメートで呼びかける	志望	3.2	1.11	4.81	398	***	志望>非志望
	非志望	2.64	1.18				
33. 学校内に相談できるクラスメートが出来る様に学校が手伝う	志望	3.41	0.99	2.97	397	**	志望>非志望
	非志望	3.08	1.20				
34. 不登校の兆候が現れたら、教員全体で共有して指導する	志望	3.62	1.07	5.02	397	***	志望>非志望
	非志望	3.04	1.24				
35. 教師が授業を楽しみたいと思える様に工夫する	志望	4.04	0.90	2.84	398	**	志望>非志望
	非志望	3.75	1.12				
36. 教師が、不登校の児童・生徒と真剣に向き合う	志望	4.47	0.82	3.42	397	**	志望>非志望
	非志望	4.15	1.06				
37. 同じ悩みを持つ子ども達が話し合える場所をもうける	志望	4.03	0.87	1.96	395	*	志望>非志望
	非志望	3.83	1.19				
38. クラスメートに不登校の児童・生徒に対する適切な対応方法を教える	志望	3.5	1.03	1.77	396		
	非志望	3.31	1.16				
39. 学校が児童・生徒の小さな変化に気がついて対応する	志望	4.23	0.92	3.38	397	**	志望>非志望
	非志望	3.89	1.04				
40. 担任のみに責任を負わずに、専門機関とも連携しながら学校全体で支援する	志望	4.42	0.91	3.87	392	***	志望>非志望
	非志望	4.02	1.10				
41. 児童・生徒が居心地の良い場所を見つけれられる様に学校が積極的に考える	志望	4.19	0.79	3.74	397	***	志望>非志望
	非志望	3.85	1.00				
42. 大学生など歳の近い先輩が、児童・生徒に関わって支援出来るようにする	志望	3.85	0.95	2.36	398	*	志望>非志望
	非志望	3.62	1.01				

Note: ***p<.001 **P<.01 *P<.05

Table 9 教員志望者と非志望者の因子の得点の比較

因子	度数		平均値		標準偏差		t値	df	有意確率 (両側)	平均値比較
	教員志望	非志望	教員志望	非志望	教員志望	非志望				
因子Ⅰ	221	165	4.21	3.93	.63	.73	4.15	384	***	教員志望>非志望
因子Ⅱ	224	167	4.09	3.86	.70	.80	2.98	389	***	教員志望>非志望
因子Ⅲ	227	168	3.45	3.05	.77	.91	4.76	393	***	教員志望>非志望
因子Ⅳ	227	166	3.95	3.66	.65	.79	4.07	391	***	教員志望>非志望
因子Ⅴ	228	167	3.05	3.15	.73	.81	-1.29	393		
因子Ⅵ	229	171	3.11	2.99	.67	.91	1.64	398		
因子Ⅶ	231	171	4.19	3.85	.75	.91	4.03	400	***	教員志望>非志望

Note: *** p<.001

感じたと考えられる。

また11の項目では5%以下の有意差がなかった。これらは、「3.不登校の児童・生徒のみのクラスを作って、過ごし易い様にする」、「5.所属するクラスを臨機応変に変更出来る様にする」、「14.極めて少人数のクラスを設けて登校しやすくする」、「22.部活の中で起きやすいので、部活参加を自由にする」、「24.気分が落ち着くまで存分に休んでも良いというルールを作る」、「25.自宅でPCなどでも授業を受けられる様にする」、「30. 教室内のルールを緩くするなどして、自由な活動を可能にする」、「38. クラスメートに不登校の児童・生徒に対する適切な対応方法を教える」の8項目と、「18.学校が不登校の児童・生徒個々に合わせた対応方法を見つける」、「20.学校内に『楽しい』と思える場所を増やす」、「21.学校に行きたいと思わせる工夫をする」の3項目である。前者の8項目は、両群とも平均値が2点台と3点台であり、双方ともに期待が低くて差がない。

また、後者の3項目は両群とも平均値が4点台であり、双方ともに期待が高くて差がない。

因子次元の比較結果をTable9に示した。第7因子（解釈不能）以外の、7つの因子での比較結果で、第Ⅰ因子（周囲の積極的関心）、第Ⅱ因子（周囲の工夫）、第Ⅲ因子（クラスメート・教員の支援）、第Ⅳ因子（クラス以外の居場所）、第Ⅶ因子（積極的な寄り添い）の5因子において、5%以下の有意差があり教員志望者の平均値が高かった。結果から教員志望者の方がこれらの5因子の支援方法に、より積極的に期待していることが分かった。

「不登校」支援についての試案(1) —大学生の意見に基づいて— (松浦 光和・松浦 明美)

付録「不登校支援アンケート」

回答欄の数字の意味
 1…とても良い
 2…やや良い
 3…どちらとも言えない
 4…やや悪い
 5…とても悪い

項目番号1から42は、いじめ問題を減らすために学生諸君が提案した方法です。それぞれについて、あなたは、どう思いますか？
 上の「回答欄の数字の意味」を見ながら、あなたの考えを回答してください。

- | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---------------------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|
| 1. 教員が、児童・生徒の悩みを聴くための機会を定期的にもうける | <input type="checkbox"/> |
| 2. 寄り添ってくれる教師が増える様に学校が工夫する | <input type="checkbox"/> |
| 3. 不登校の児童・生徒のみのクラスを作って、過ごし易い様にする | <input type="checkbox"/> |
| 4. 不登校の児童・生徒が自由に来て、自由に過ごせる空間をつくる | <input type="checkbox"/> |
| 5. 臨機応変に所属するクラスを変更出来る様にする | <input type="checkbox"/> |
| 6. 2名の担任にしてゆとりを持って指導できる様にする | <input type="checkbox"/> |
| 7. 児童同士・生徒同士が積極的に関わられるような環境をつくる | <input type="checkbox"/> |
| 8. 学力以外の側面についても評価して、児童・生徒が自信を持てるようにする | <input type="checkbox"/> |
| 9. 居場所は教室だけでなく保健室などもあることを学校が教える | <input type="checkbox"/> |
| 10. 「自分はこのクラスに必要だ」と思えるように指導をする | <input type="checkbox"/> |
| 11. 担任は、何度もこまめに相談に応じる様にする | <input type="checkbox"/> |
| 12. 授業を通してクラスメートが不登校の人の気持ちを考える様にする | <input type="checkbox"/> |
| 13. 他の児童・生徒と食わないように、時間をずらして登校できる様にする | <input type="checkbox"/> |
| 14. 極めて少人数のクラスを設けて登校しやすくする | <input type="checkbox"/> |
| 15. 社会が、児童・生徒に居場所を提供する様にする | <input type="checkbox"/> |
| 16. 不登校原因の発見と対応を早期に行う | <input type="checkbox"/> |
| 17. 教師が工夫してクラスを楽しみと思えるようにする | <input type="checkbox"/> |
| 18. 不登校の児童・生徒にとって最も良い方法を見つけて支援する | <input type="checkbox"/> |
| 19. 学校と家庭が連携して、不登校の児童・生徒に向き合う様にする | <input type="checkbox"/> |
| 20. 学校内に「楽しい」と思える場所を増やす | <input type="checkbox"/> |
| 21. 学校に行きたいと思わせる工夫をする | <input type="checkbox"/> |
| 22. 部活の中で起きやすいので、部活参加を自由にする | <input type="checkbox"/> |
| 23. クラス単位ではなく、大学の様に誰々が授業を選択できるようにする | <input type="checkbox"/> |
| 24. 気分が落ち着くまで存分に休んでも良いというルールを作る | <input type="checkbox"/> |
| 25. 自宅でPCなどで授業を受けられる様にする | <input type="checkbox"/> |

- | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|--|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|
| 26. 登校したくなるようなきっかけを学校が検討する | <input type="checkbox"/> |
| 27. 教師やカウンセラーに相談しやすい環境を作る | <input type="checkbox"/> |
| 28. クラス以外の居場所を複数設定する | <input type="checkbox"/> |
| 29. 保健室登校をしながら慣れる様にする | <input type="checkbox"/> |
| 30. 教室内のルールを緩くするなどして、自由な活動を可能にする | <input type="checkbox"/> |
| 31. 社会が学校以外にも、落ち着ける場所を増やす | <input type="checkbox"/> |
| 32. 学校に来る様に教員やクラスメートで呼びかける | <input type="checkbox"/> |
| 33. 学校内に相談できるクラスメートが出来る様に学校が手伝う | <input type="checkbox"/> |
| 34. 不登校の兆候が現れたら、教員全体で共有して指導する | <input type="checkbox"/> |
| 35. 教師が工夫して授業を楽しみと思える様にする | <input type="checkbox"/> |
| 36. 教師が、不登校の児童・生徒と真剣に向き合う | <input type="checkbox"/> |
| 37. 同じ悩みを持つ子ども達が話し合える場所をもうける | <input type="checkbox"/> |
| 38. クラスメートに不登校の児童・生徒に対する適切な対応方法を教える | <input type="checkbox"/> |
| 39. 学校が児童・生徒の小さな変化に気がついて対応する | <input type="checkbox"/> |
| 40. 担任のみに責任を負わずに、専門機関とも連携しながら学校全体で支援する | <input type="checkbox"/> |
| 41. 児童・生徒が居心地の良い場所を見つけれられる様に学校が積極的に考える | <input type="checkbox"/> |
| 42. 大学生など歳の近い先輩が、児童・生徒に関わって支援出来るようにする | <input type="checkbox"/> |

以下の質問に回答してください。

- 教職免許を取りますか はい いいえ
- いじめ問題に関心はありますか はい いいえ どちらとも言えない

ご協力、有り難うございました。

引用文献

- 早川すみ江 2002 スケールカウンセラーとして関わった不登校生徒との心理過程療法
心理臨床学研究, 20, No5, 453-464.
- 文部科学省 2005 「学校教育法施行規則の一部を改正する省令の施行等について」(通知)
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2016/04/13/1235264_001.pdf
- 文部科学省 2015 不登校児童生徒への支援に関する中間報告
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2015/09/07/1361492_01.pdf
- 文部科学省 2017 平成28年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」(速報値)について
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/10/_icsFiles/afiedfile/2017/10/26/1397646_001.pdf
- 中地展生 2011 不登校児の親グループに参加した母親からみた家族システムの変化に関する実証的研究
心理臨床学研究, 29, No3, 281-292.
- 筒井千恵・仙波圭子・大野由美子・小林正幸 1998 不登校事例に対する教師の前兆行動の把握と対応に関する研究
カウンセリング研究, 31, No2, 117-125.

(2017年10月16日受領、2017年10月27日受理)

(Received October 16, 2017; Accepted October 27, 2017)

Tentative Plans for Assisting Truant Students(1): A Research Based on College Students' Opinions

Mitsukazu MATSUURA

Akemi MATSUURA

The problem of truant students is the topic of much research and different solutions have been proposed. The number of truant students in 2016 is 134,398. This number has decreased compared with peaked year 2011(134,398). However, the rate in 2013 is 1.23% and 2016 is 1.35%. Thus, the rate did not improve. This research summarizes the opinions regarding truancy from college students. There were two groups of student participants in this study: those who plan on becoming teachers in the future and those who had no such career plan. Since these students were recently elementary, junior and high school students, their views, rather than those of grown-ups, are assumed to be close to those of truant students.

Factor analysis of our questionnaire data reveals the following factors: 1 “others taking a proactive interest in them,” 2 “ingenious attempts by others to make a positive image of school,” 3 “assistance from classmates and teachers,” 4 “providing a place other than the classroom to relax,” 5 “promoting independent activities,” 6 “flexible space and time class for truant students,” 7 “uninterpretable.” Factor 4 and 5 are found as schools have abolished their rules. Factor 6 is strived to promote school kids' independent activities. Finally, factor 7 is any behavior in which there is a familiar and positive involvement with school teachers and counselors. They are necessary for these factors work smoothly.

From the results of this research, we discover that there is a gap between the would-be teaching credential candidates and students who have no intention of becoming teachers. Each side has different attitudes about “assisting truant students.”